

 女性医師の窓

## 医師10年目、母12年目

松原病院 守屋 有佳

現在働いている病院は自宅と同じ校区内にあります。通勤時間も短く、また多くの配慮をしてもらい、何とかフルタイムでの勤務を続けています。医局で机を並べる上司は、母としても、医師の夫を持つ立場としても尊敬すべき先輩女性医師であり、今の私の状況を理解してくれているという点でも恵まれた環境で働けていることを日々、実感しています。

医師10年目、母12年目。母歴の方が少し長い私は、その事情ゆえ「これからやってみたいこと」を考える余裕はなく、「今、できること」を探しながら働いてきたように思います。結果として、卒後すぐにイメージした10年後の医師としての自分は、今の自分とはやはり違います。研修医の頃は時間がかかっても専門性の高い内科医になりたいと思っていましたが、3年目に一般内科での研修にシフトし、6年目には回復期リハ病棟で仕事をしていました。そして今は高齢者医療、とりわけ認知症診療に従事しています。諸事情で祖父母の協力が得られない環境で4人の子供を産み育てながら、それでも医師としての仕事を続けたかった自分にはこれが精一杯でした。何をしても中途半端、自己満足、そう思われても仕方がないのかもしれませんが。やはり卒後しばらくは単身でがむしゃらに働き、多くの知識や技術を習得した後に家庭をもつことが好ましいのかもしれませんが。同世代の女性医師と比べ、急性期への対応や当直など、自分にはできないことばかりを数えてしまい下をむいていた時期もありました。

今、自分に問いかけてみます。子供を4人も産まなかったらもっと違う10年後だった？

出産なんてもう少し後でもできたじゃない？今の自分を後悔している？

どれも答えはNOです。医師である自分、母である自分、あまり役にはたっていませんが妻である自分、自分のための自分。どの自分が欠けても、34歳の今、この瞬間に感じている充足感を得ることはできなかったのではないかと思うのです。

昨今、女性医師の働き方についての様々な意見交換がなされています。医師会のホームページには病児保育やベビーシッターの情報があますし、院内保育所など様々な支援策を掲げての求人情報も見かけます。たった10年前と比べても、ハード面に関して言えば、ずいぶんと子育て世代の女性医師が働き続けることを応援する環境になってきたと思います。では、ソフト面ではどうでしょうか。勤務中に子供が熱を出した時、翌日からは病児保育を利用するとしても、とりあえずのお迎えをどうしようか？保育園ママの誰もがぶつかる壁です。そんな時すぐに保育園へ向かうことのできる環境であるかどうか、お迎えに行くようにとそっと一声かけてあげられているかどうか。いくらハード面が揃っていても、それを誰に遠慮することなく利用しようと思える環境がなければ意味がありません。結局、子育て世代の女性医師が働くことをためらわないために1番大切なことは、月並みですが周囲の理解だと思うのです。

ひとくくりに「子育て世代」と言っても、所属科、夫や祖父母の協力の有無などそれぞれに環境は違い、その結果、ワークスタイルも異なります。でもどんな働き方をしているか、子育てをしながら働くことを選んでいるこの事実を認めあい、理解しあうことが大切だと現役の立場から発信できればと思います。